

原爆文学研究会報

第7号

原爆文学研究会 二〇〇三年八月

疎外感 「授業中も着帽のままの学生を、教師は注意すべきか」――フアッシュョンとして帽子が流行する中、ある専門学校の教職員会議で「授業中脱帽」の校則化をめぐる、意見が分かれました。学校関係者からきいた話です。「成年を過ぎた人間を、そこまで統制することはない」「室内脱帽は基本的マナー」……とにかく議論の前に、各自の立場を挙手で示そう、ということになりました。まず、「校則化賛成」。教職員約四〇名のほとんど全員が挙手。次に、「校則化反対」。手を挙げたのはたった四人。その中に、理事がいました。今年還暦の彼は、理由についてこう説明しました。

「数年前、夏も冬も朝も晩も、帽子を被りっぱなしだった女子学生がいた。頭部に、見た目にわかる障害があった。私は彼女に『授業中だから脱ぎなさい』とは言えなかった。この件に限らず、細かいところまで校則でかためれば、同時に〈例外〉を生み出す。校則を守らなくていい〈例外〉という立場は、当人に〈疎外感〉を再確認させないだろうか。」

今年の長崎の平和祈念式典で、山崎栄子氏が手話で自らの被爆体験を語りました。手話による「平和の誓い」は、初めての試みです。テレビ中継でその様子を見てみると、山崎氏をアップで映していた画面が、途中、スーツと逸れ、式場全体の遠望へと移りました。通訳のナレーションは続いています。やがて、画面はまた「スピーチ」中の山崎氏へと戻りました。

おや、と思いました。テレビを見ている聴覚障害者にとっては、「ス

ピーチ」の文脈が途切れた瞬間ではなかったか、と。

私たちは、平和祈念式典の鳥瞰的な風景にあまりにも慣れてしまったようです。遠くから眺めて、「今年もやってるな」と安心したとたん、式典の意味に対する想像力も、誰かを〈疎外〉した一瞬にも、なんとなく、鈍くなってしまふのかもしれない。（内田 友子）

第七回 原爆文学研究会報告

二〇〇三年六月二十八日（土）九州大学六本松キャンパスで開催した「第七回 原爆文学研究会」には、福岡県内外から約三〇名が集いました。

野坂氏の研究発表に続く質疑応答では、「映像技術の進化に伴ってスプラッター・ホラーのようなリアルさが、逆にリアリティを希薄化するような現象も起こってくると思うが、それと原爆の表象との関係をどのように考えればよいのか」等の発言がありました。

服部氏の研究発表については、「真杉静江が原爆乙女の支援に関わった前後の動向が興味深い」「原爆乙女たちが政治的でないがゆえに政治を動かすという図式に働く力をどのように理解すれば良いのか」等の発言がありました。



◇ 研究発表 1

今村昌平と原爆の表象

野坂 昭雄 (大分県立芸術文化短大)

井伏鱒二の『黒い雨』を映画化した今村昌平が、その九年後に公開された「カンゾー先生」(一九九八)に再び原爆を登場させた背景には、原爆を巡る一つの問題が伏在していたと考えられる。確かに後者の原爆は基本的なストーリーとは一見関わりがない。だが、原爆の閃光を見つめる赤城とソノ子の恍惚とした表情を通して、ある種の不気味さすら感得されるし、またそれまでのストーリーを相対化するような強烈な意味作用も読み取ることが可能である。

一九七五年から翌年にかけて発表されたエッセイ「からゆきさん」の中で、今村はシンガポールやマレーシアの日本人娼館で働いていた女性たちを描いている。そして彼はこのエッセイで、日本という国家の近代化とそこから排除された存在(「棄民」)との隔たりに注目している。本発表ではまず、こうした視線や問題意識がその後の「黒い雨」および「カンゾー先生」へと連なるものであることを指摘した。

原爆を巡る表象を通して被爆国である日本のナショナルイデオロギイが想像的に構成されていることは間違いないとして、その際の表象と実際の被爆体験との間にはもどかしいまでの隔たりが存在している。それは、非被爆者が「私は日本人として原爆に…」と言う瞬間に不意に生み出されるものではないだろうか。原爆を表象したりそれについて語ったりすることは(あらゆる政治的発言についても言える

ことだが)、いかなる主体の位置からなされるべきなのであるだろうか。

「からゆきさん」からも読み取れるように、今村はこうした点について決して鈍感ではなかったが、それにもかかわらず「黒い雨」が海外(カンヌ映画祭)で評価されなかったことを受けて「我々の東洋的な物の考え方は西欧の人たちには通じないのだ」といった紋切り型の発想をしてしまう。「黒い雨」が映画作品として優れており、また原爆をリアリステイックに描く点で評価できるにせよ、異なる位相には別の問題が存在する。こうした点から、原爆の表象は個々の被爆者、あるいはグローバルな平和運動との関係において極めて複合的な問題を孕んでいることが理解できるのである。

「カンゾー先生」は原爆を真つ正面から描いた作品ではないこともあり、「黒い雨」とはやや異なる方向性を打ち出している。例えば、前者には捕虜收容所の様子が描かれるが、脱走したオランダ人捕虜ピートを赤城からは匿り、そのために軍に連行される。しかしこうした日本のファシズムに対する彼らの抵抗の姿勢は、末尾の原爆、そしてそれを眺める赤城とソノ子の恍惚とした表情と連関して一つの明確な主題を形成すようには描かれていない。このズレ(例えばソノ子は原爆の閃光を「神風」、赤城はキノコ雲を「肝臓」だと語る)を今村のユーモアと解することも可能だが、発表者はこの映画に原爆の複雑な問題そのものが表象されていると考えた。それは積極的に関係性自体へと我々の目を向けさせる。発表の際にはこの点をうまく説明することが出来なかったし、今でもそれは自分にとって困難なことである。だが映画末尾の原爆は、被爆国日本に限定されない「戦争のすべて」(赤城の最後の台詞は「…いやいや、戦争のすべてを恨んだる姿じゃろう」である)、その複雑な絡み合いにこそ向けられていると考えられるのである。

「長崎原爆乙女」の物語と『マリアの首』——非完結への勇氣——

服部 康喜（活水大学）

田中千禾夫『マリアの首』の登場人物「鹿」は、原爆によるケロイドの「治癒を拒絶する女」として最も特徴的な存在の仕方をしていく。彼女は「この私の顔、醜くふくれてゆがんだ顔、それは光栄ある私の目的、聖なる私の自由のしるし！」とまで言い切る。それに対して「矢張」はその名の通り「やはり」＝「必然性」を主張し、政治の「必然性」をすべてに優先して彼女がそこに参加すべき居場所とする。それは「鹿」の身に負ったケロイドを「あらゆる政治の総決算のしるし！」とする「矢張」の主張に端的に示されている。こうして『マリアの首』はケロイドを「自由」と「必然性」に引き裂きつつ、その本源的な位置づけ＝枠組みをめぐって熱い議論と行為の可能性に観客と読者を巻き込もうとする。

ところで「鹿」という「治癒を拒絶する女」について、実は原爆というコンテキストの中に改めて置いてみる時、その特異性は際立ったものとして浮上する。作品の背景にあるケロイドの治療は、広島流川教会谷口清牧師が設立した「ヒロシマ・ピース・センター」が中心となって、まず東大清水外科での治療が開始されたことがその発端となっている、これがいわゆる「広島原爆乙女」の物語の開始であり、やがて原爆投下国アメリカでの治療へと展開を見せる。その間に谷口清牧師に引率された「広島原爆乙女」たちが巣鴨の戦

犯を訪問、両者が涙ながらに手を握り合うという、一種「和解」に向けた政治を演じるという彼女たちの役割が付加されていったことは注目しなければならない。やがてそれはアメリカ本土での「和解」のドラマとして感動を呼ぶことになるはずである。

一方、「長崎原爆乙女」の物語は、作家真杉静江の仲介によって「ヒロシマ・ピース・センター」の援助の下、「長崎原爆乙女」の治療が呼びかけられ、長崎市がそれに全面的に乗るといったことが物語の発端をなす。そこには原爆被災者救済に対する長崎市の非主体的なあり方と、同じ苦難を生きるゆえの「広島原爆乙女」たちの純粋な友情などが合い重なって、非政治性が顕著な特徴をなしている。それゆえに「長崎原爆乙女」の物語には感動が、そしてそのみがか人々の共感を湧き起こすことになる。そして彼女たちの登場が、長崎市民の中に原爆被災者救援運動へと誘う大きな共感の輪を広げて行った。実際、日本が主権国家として国際社会の中で認知されたサンフランシスコ講和会議（一九五一年）以後、国民が原爆の惨状を写真で認識しえたのがその翌年からであることを思う時、広島・長崎の「原爆乙女」の登場は、戦争の惨禍を具体的に想起できる生きた実例でもあったし、国民はようやく戦争に対して眼を向ける余裕をこの時期、ようやく持ちえることができたと言える。

こうした原爆のコンテキストを追いながら、「長崎原爆乙女」の物語が感動という中で完結して行ったこと、そして一方「広島原爆乙女」の物語も日米の「和解」という政治ドラマとして完結して行ったことを見据えつつ、『マリアの首』が完結することを拒否する強力なベクトルを今なお保持していることを確認して行きたい。そしてその先に、あの永井隆の完璧とも言える完結性＝神の必然性＝摂理という言葉が見えてくる場所によりやく立ったことも、あわせて確認したい。

彙報

第七回 原爆文学研究会

- 日時 二〇〇三年六月二十八日(土) 十四時より
- 会場 九州大学六本松キャンパス大学院棟一〇一教室
- 内容 研究発表

今村昌平と原爆の表象

野坂 昭雄

「長崎原爆乙女の物語」と田中千禾夫「マリアの首」

服部 康喜

平和、恐怖とフラケンシュタイン博士

―オーストラリアの新聞に於ける原爆投下の報道―

バーナビー・ブレーデン

“The Irish Times”誌の原爆投下に関する記事について

ローナン・ハンド

フランスの原子爆弾投下直後の報道をめぐって

イザベル・エロワ

- 懇親会 (十八時)

編集後記

第七回研究会では、野坂氏のご発表のときにモノクロの『黒い雨』とカラーの『カンゾー先生』の一部を連続で見せていただきました。二者のコントラストは鮮明で、強烈な印象を残しました。これらを対置させ、原爆の表象をめぐる困難さを浮き彫りにする氏のご発表

は、大変刺激的なものでした。

服部氏のご発表では、第三回研究会(二〇〇二年六月)で主に中国新聞の記事を資料とした広島原爆乙女についての報告(発表者・中野)とは別の角度から原爆乙女を問題化したご発表でした。特に「長崎原爆乙女」の非政治性を巡る問題や田中千禾夫「マリアの首」における「鹿」とマリアの象徴性との関係の分析は示唆に富むものでした。

そして、ブレーデン氏・ハンド氏・エロワ氏(いずれも九州大学大学院の留学生)に、それぞれオーストラリア・アイルランド・フランスにおける原爆投下直後の新聞報道について報告をしていただきました。会の時間の関係上十分な発表時間を取ることができなかったのですが、当時の国家間の関係や原爆についての言説の特色について、実に興味深い発表でした。〔詳細は今月(二〇〇三年八月)に発行しました「原爆文学研究」第二号をご覧ください。〕

先日、この研究会での成果をまとめた機関誌「原爆文学研究」第二号を発行いたしました。同時に創刊号を原爆文学研究会ホームページにてインターネットで公開しました。どちらもご覧いただき誠にさ意見や感想をいただければ幸いです。

(N)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒811-6520 福岡市中央区六本松4-2-1

九州大学大学院比較社会文化研究院 花田俊典研究室内

tel/fax 092-726-4597 e-mail hanada@rc.kyushu-u.ac.jp

URL <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/~th/genbunken/index.htm>